

留学の目的、満足度、9月入学 ——留学生アンケートの定量分析から——

松塚 ゆかり（大学教育研究開発センター）
白松 大史（社会学研究科博士後期課程、
大学教育研究開発センターRA）

概要

2008年11月に実施した留学生アンケートを用い、1. 留学生はなぜ一橋を選んだのか、2. 彼らは大学での教育と学習に満足しているか、3. 秋入学は必要なのか、について検討した。まず本学に留学している学生のうち、学位を取得すること、もしくは専門分野を学ぶことを目的としている学生が8割以上を占めており、日本の社会や文化への関心から留学する学生が4割以上を占める日本の平均的大学とは学生層に大きな違いがある。特にこれら専門分野を志向し本学に留学した学生は、勉強や学習、施設や教員に関する満足度が高いことが確認された。留学生の満足度は、全体的に見てみると、（1）学習環境の満足度、（2）日本語能力、（3）奨学金などにより規定されている。図書館利用の頻度が高いほど教育や学習に関する満足度が高い一方、専門書や研究資料が不足していることで満足度が下がる。日本語力については、学位取得を目的とせず、入学前の日本語学習率も低い研究生や交流学生が不満を抱えており、このことが学習満足度を下げる要因となっている。奨学金については、その有無が満足度を左右する一方、運用のあり方にも多くの指摘があり、特に受給者の選定基準を明確にすることが強く求められている。9月入学については交流学生や西欧諸国の学生を中心にその有効性が確認された。学習環境の設定、日本語教育、奨学金、入学時期全てについて、留学の目的、在籍課程、出身国の教育制度などによりニーズは大きく異なっており、留学生個々の状況に合わせた検討が求められる。

はじめに

2008年11月に学務部留学生課および留学生センターが本学の留学生を対象に実施したアンケートの結果から、1. なぜ留学生は一橋を選んだのか、2. 留学生は大学に満足しているか、3. 本学の留学生にとって9月入学は必要なのか、の3点に焦点をあて定量的に分析する。基礎集計結果は3月に出版された「一橋大学留学生アンケート調査報告」に掲載されている。従ってここでは、回答者の属性および回答間の相関性などを考慮することにより、どのような学生がどのような問題を提起し、その解決のためにはいかなる方策を講じ得るのかを明らかにしたい。

アンケートの有効回答者数は以下に示すとおり、学部生 63 名、大学院生 150 名、研究生 45 名、交流学生 24 名の計 282 名であった。これはアンケート実施当時の全留学生数 585 人の 48%にあたる。大学院生が 5 割以上と最も多く、次いで学部生の 22.3%、研究生の 16%、交流学生 8.5%と続く。

表 1 課程別アンケート回答者数

	度数	%
学部生	63	22.3
大学院生	150	53.2
研究生	45	16.0
交流学生	24	8.5
合計	282	100.0

1. なぜ一橋なのか

(1) 留学の動機

一橋大学への留学理由の前に、留学そのものの理由を尋ねる設問がある。「あなたの留学の目的は何ですか」との問いに対し学生は、① 学位取得のため、② 特定分野の教育を受けるため、③ 学生交流制度の活用、④ その他、の中から選択している。回答者の課程別に留学の目的を集計した結果を表 2 に示す。まず、全体では学位の取得が 57.1%、次に特定分野の教育を受けるための 30%となっている。これは二宮（2004）が明らかにした日本への留学理由のトップ 3 である「学位を得たいと思ったから（47.7%）」「日本の社会や文化に関心があったから（46.9%）」「奨学金をえることができたから（46.2%）」と比較すると、学位や特定の教育、すなわち学問を主目的として渡航した学生が本学に多いことがわかる。

表 2 では留学目的を課程別に見ている。学部生、大学院生、研究生については、6 割以上が学位の取得を目的としており、次いで学部生の 23.8%、大学院生の 34.7%、研究生の 27.9%が特定分野の教育を受けるために留学したと答えている。正規課程に在籍する学生の 9 割が学位の取得と特定分野の教育を受けることを目的に留学していることが確認できる。一方、交流学生は、5 割以上が交流制度の活用を目的としており、留学の意図が他の 3 つのグループとは大きく異なる。留学の目的により科目履修のあり方、日本語の学び方、支援の受け方、そして生活全体のあり方が大きく異なり、設問を交差する定量分析の信頼性を損ねるために、留学目的に関わるこれ以降の分析は学部生、大学院生、研究生のみに焦点をあてて行う。本学にとって交流学生が重要であることは言うまでもないが、交流学生を対象とした分析は別途行うこととしたい。

表 2 課程別留学目的

	学位の取得	特定分野の教育 を受けるため	学生交流制 度の活用	その他	合計
学部生	41	15	2	5	63
%	65.1%	23.8%	3.2%	7.9%	100.0%
大学院生	90	52	1	7	150
%	60.0%	34.7%	0.7%	4.7%	100.0%
研究生	26	12	1	4	43
%	60.5%	27.9%	2.3%	9.3%	100.0%
交流学生	3	5	13	3	24
%	12.5%	20.8%	54.2%	12.5%	100.0%
合計	160	84	17	19	280
%	57.1%	30.0%	6.1%	6.8%	100.0%

(2) 一橋を選択するきっかけと理由

「一橋大学を選んだきっかけや理由を教えてください」との問いに、回答者は、① 家族のすすめ、② 先生・先輩・友人のすすめ、③ 一橋大学のホームページを見て、④ 留学生のための進学説明会に参加して、⑤ 学びたい専門分野があったから、⑥ 協定校だから、⑦ 就職に有利、⑧ 奨学金がもらえるから、から選択している。この質問に対する全回答者数は 258 人、複数回答が可能である。回答結果を表3に示す。

表 3 一橋大学を選んだきっかけと理由

	回答者数	%
家族のすすめ	14	5.4
先生・先輩・友人のすすめ	165	64.0
大学の HP を見て	45	17.4
留学生のための進学説明会に参加して	16	6.2
学びたい専門分野の存在	141	54.7
協定校だから	4	1.6
就職に有利	38	14.7
奨学金がもらえる	23	8.9
その他 ¹	12	4.7

※ 表中の%は全回答者に占める割合を示す。

選択肢の中、「きっかけ」と「理由」が混在しているが、複数回答であるため、個々の選択回答を独立した効力を持つものとして扱う。回答比率を見てみると、「先生、先輩、友人のすすめ」がきっかけもしくは理由で一橋を選んだと答えているものが 64%で最も高く、次いで「学びたい専門分野があったから」が 54.7%、「一橋大学のホームページを見て」が 17.4%、「就職に有利」が 14.7%となっている。一橋大学のホームページを見て本学を選択した学生は、まず留学の意思があり、次いで大学を選択する

¹ その他の理由としては、ビジネスに得意そうだから、日本大使館のすすめ、国立大学だから寮に住む事ができそう、美しいキャンパスや住みやすい町に位置しているから、出身国が同じ先輩が多かった、中国に出版された日本お名門大学紹介書より、実力校であるから、おそろいたい先生がいるので、有名だと聞いたから、受験にきた時の先生やキャンパスの全体的な印象がよい、宿舎があるから、日本人の親戚のすすめ、などがあった。

ための情報収集の過程の中で、一橋を選んだということだろう。これに対し、知人のすすめや学びたい専門分野があったこと、また就職に有利であることを理由に本学を選んだ学生は、本人もしくは周囲の知人があらかじめ本学の特徴や強みを知って一橋を選択したものと推察される。回答間の相関を見ると、学びたい専門分野があつて本学を選んだ場合と、就職に有利であるからとの理由で選んだ場合とで強い相関がある²。卒業後の具体的な計画をもとに専門分野を考慮し、その専門教育を提供する本学を特に選択したことがうかがわれる。

潜在留学生への対応という観点でこれら回答から読み取れることは、社会科学に特化した高い専門性と、就職に強いという本学の特徴が、国外の学生に対しても効力を有していることであり、専門教育と就職に強い一橋を引き続き強化することが、留学の誘因となり得ることである。また留学生の増加にあたっては、入口と出口で専門教育と連動する方策が求められるであろう。たとえば、国内にすでに滞在する外国人学生に一層注目する一方、専門教育のアウトプットの場合、すなわち、特に優秀な学生についてはその専門能力を効果的に生かせる場に繋げる仕組みを作ることが充実した勉学へのインセンティブとなるだろう。

一方、「協定校であるから」「進学説明会に参加して」「奨学金がもらえるから」との理由で本学を選択した留学生が少ないことは、他大学の状況と比較しなければ断定はできないものの、この分野をより強化する余地がある、と受け取ることができる。近年世界各国の大学と進めている協定締結が今後効果を発揮していくものと思われる。交流学生が活用できる単位互換制度の確立や奨学金制度の拡充を図ることも問われるだろう。また、留学中は日本語の習得に精一杯となってしまう、本学の社会科学研究に触れる機会を得ることができないのは残念なことであり、このことについては英語による授業で単位や学位を授与できる体制を作ることに対応が可能と思われる。

（３） 本学を特に選ぶ学生の傾向

既存の強みをより強化するという視点から、卒業後の就職を意識してその分野の専門教育を学ぶために本学を選択した学生に焦点をあてて検討する。まず、専門分野を追究し本学に留学した学生の勉強・学習に関する満足度は他の動機で留学した学生に比較すると唯一有意に高い。「一橋大学での勉強・学習に満足していますか？」の問いに学生は「とても不満」「すこし不満」「普通」「ほぼ満足」「とても満足」の中から選択しているが、これを5段階のスケールにして留学動機で単純回帰した結果が表4である。動機について「その他」の平均値が定数となっている。学びたい専門分野があるから、協定校であるから、などの理由で一橋を選んだ学生の満足度が相対的に高い傾向にある一方、進学説明会や家族のすすめなど、本人の「一橋でなければ」との意向のもとに本学を選択したわけではない学生は、勉学に関する満足度が低い。

² Pearson の相関係数が 0.225 で 0.00 有意。実際値では「就職に有利であるから」と答えた 38 名中 31 名が学びたい専門分野があつた、と答えている。

表4 大学選択の理由と満足度

	非標準化係数		t
	B	標準誤差	
家族のすすめ	-0.241	0.224	-1.074
先生先輩友人のすすめ	0.094	0.105	0.893
大学HP	0.140	0.129	1.089
進学説明会	-0.403*	0.198	-2.034
学びたい専門分野の存在	0.208*	0.099	2.111
協定校	0.513	0.303	1.691
就職に有利	0.055	0.143	0.385
奨学金がもらえる	-0.127	0.172	-0.736
(定数)	3.947	0.115	34.236
Adj. R ²	0.054		
総観測度数	272		

* 5% 水準で有意 (両側)

他に満足度を測る指標として、本学で勉強する上で不足している点を答える設問がある。「一橋大学で勉強をするうえで、不足していると思うことは何ですか」との問いに学生は、「(自分の) 日本語能力」「(自分の) 一般教養」「(自分の) 専門知識」「大学の施設」「専門書・研究資料」「専門の授業」「教員の指導力・熱意」「特に困っていない」「その他」から選択する。複数回答が可能である。表5では学びたい専門分野があつて本学に留学した学生(149名)とそれ以外の目的で本学に留学した学生(133名)がそれぞれどの項目に不足を感じているかを比較している。専門教育を求めて本学に入学した学生はそれ以外の学生に比べて、日本語能力を除くと、自分の一般教養や専門知識が不足していると評する割合が多い。一方、専門教育指向の学生は、大学が提供するリソースに不足感を持っている場合がそれほど多くない。「専門書と研究資料」を除き、専門分野の学習を意図して本学を選んだ学生の不足感が総じて少ないことがわかる。施設、サービスともに、専門学習を目的に本学を選んだ学生の要求を満たす傾向にあることがわかる。

表5 学生の不足感(専門教育を目的とする者とそれ以外)

	専門教育目的		それ以外	
	回答数	%	回答数	%
自分の日本語能力	56	37.6	63	47.4
自分の一般教養	18	12.1	14	10.5
自分の専門知識	54	36.2	36	27.1
大学施設	9	6.0	13	9.8
専門書・研究資料	26	17.4	20	15.0
専門授業	17	11.4	24	18.0
教員の指導力・熱意	11	7.4	14	10.5
特になし	35	23.5	23	17.3

最後に、これら専門学習を目指して本学に留学した学生の特徴として、来日から一橋入学までの期間が長いことがあげられる。表 6 は、来日から一橋入学までの期間（月数）を本学を選んだ理由で回帰した結果である。学びたい専門分野がある学生の日本滞在期間が長く、統計的有意性も最も高い。滞在期間には留学生の送出国が作用する可能性が高いと思われるため、Model 2 では送り出し国に関わる変数を加えた結果を示している。アンケートでは送り出し国に関わる情報として「母語」を聞いているが、国籍もしくは来日前に長く居住した国名を尋ねる設問が無い。母語からかならずしも送り出し国を特定できるわけではないために信頼性の高い分析ができないが、情報がこれに限られているため母語をグループ化して変数としている。母語はアジア圏の言語を母国語とする場合を「中国」、「韓国」そして「その他アジア」に分けている。またアフリカ大陸内の言語を「アフリカ」とし、ヨーロッパは旧東欧諸国の言語と旧西欧諸国の言語を母国語とする場合に分けている。

表 6 一橋入学目的と入学までの在日期間

	Model 1			Model 2		
	非標準化係数		t	非標準化係数		t
	B	標準誤差		B	標準誤差	
家族のすすめ	18.249*	7.278	2.508	17.017*	7.313	2.327
先生先輩友人のすすめ	-4.376	3.391	-1.290	-4.658	3.452	-1.349
大学HP	0.357	4.200	0.085	0.537	4.206	0.128
進学説明会	-2.982	6.491	-0.459	-5.555	6.595	-0.842
学びたい専門分野の存在	10.151**	3.227	3.146	8.724**	3.295	2.648
協定校	-10.528	9.819	-1.072	-10.822	9.903	-1.093
就職に有利	2.799	4.661	0.600	3.443	4.672	0.737
奨学金がもらえる	-5.318	5.434	-0.979	-5.777	5.458	-1.058
その他	14.219	7.376	1.928	12.281	7.415	1.656
中国				6.008	5.387	1.115
韓国				1.332	6.268	0.213
その他アジア				3.918	5.451	0.719
アフリカ				28.623	25.802	1.109
旧西欧				-4.090	5.963	-0.686
旧東欧				-8.082	7.153	-1.130
(定数)	11.241	3.786		10.653	5.825	
Adj. R ²	0.060			0.074		
総観測度数						

* 5% 水準で有意（両側）

**1% 水準で有意（両側）

母語をコントロール変数として加えても、日本を選択をした理由と、来日から一橋入学までの期間（月数）との関係に大きな変化は見られない。学びたい専門分野があるとの理由で一橋大学を選んだ留学生はやはり滞在月数が長く、その統計的有意性も最も高い。

専門分野を追究して本学に入学した学生の他の特徴として、これらの学生は国からの送金受給者が多い一方奨学金受給額は少ない傾向にある点があげられる。しかしながら、これにより満足度が低くなっているわけではない。奨学金のあり方については次章で具体的に述べるが、他の留学生については奨学金が大学生活の満足度や不満感に与える影響は大きい。このことから、概ね本学に対する満足度の高い、一橋大学に特定して専門教科を学ぶために留学する学生には、教科のさらなる充実を図ることが適切かつ有効な方策であると考えられる。また、これら学生の来日から入学までの期間が長いことから、留学生獲得という観点からは、国外にいる潜在留学生もさることながら、国内に滞在する学生に一層注目することも肝要であると思われる。

2. 留学生は大学に満足しているか ——学習満足度を中心に——

本学にて留学生生活を営んでいる留学生のうち、学位取得のために、あるいは専門分野の研究のために、一橋大学に留学していると回答する割合は高い。この回答の高さは、本学に対する留学生の期待の表れであるとともに、本学での留学生生活が有意義なものになるか否かは、本学における研究・学習にどのくらい満足しているか（あるいは不満を抱えてしまうか）に大きく左右されるということも示唆する。ここでは、留学生が、本学での学習にどの程度満足しているのか（以下、学習満足度）について検討していく。具体的には、学習満足度を規定する要因について検討し、その結果浮かび上がった要因についてさらに検討を加えていく。

学習満足度については、「1」（とても不満）から「5」（とても満足）までの5件法を採用した。本稿では、これを1点から5点までの得点（以下、学習満足度得点と記す）として分析を進める（したがって、点数が高くなるほど学習満足度が高いことを示す）。

前述した学習満足度得点を従属変数、学習満足度に影響を与えていると思われる項目を説明変数として回帰した結果が表7である。なお、説明変数として、アンケート中の設問から、学習環境評価、日本語能力の不足、奨学金受給の有無、アルバイトの有無、健康状態、交流活動への参加頻度、日本人学生との交流頻度、の7項目を採用した。またコントロール変数として、本学での在籍期間（月数）、および在籍課程をとりあげた。

表 7 学習満足度を高める要因（重回帰分析）

	Model 1			Model 2		
	非標準化係数		t	非標準化係数		t
	B	標準誤差		B	標準誤差	
学習環境評価	0.788**	0.047	16.910	0.761**	0.047	16.094
日本語能力の不足	-0.200**	0.067	-2.968	-0.187**	0.068	-2.749
奨学金受給の有無	0.161	0.098	1.635	0.226*	0.101	2.229
アルバイトの有無	-0.131	0.068	-1.926	-0.132	0.071	-1.864
健康状態	0.008	0.037	0.231	0.013	0.037	0.347
交流活動への参加頻度	0.029	0.032	0.899	0.011	0.033	0.322
日本人学生との交流頻度	0.048	0.031	1.542	0.060	0.031	1.909
在籍月数				-0.001	0.002	-0.866
学部生				0.168	0.136	1.234
大学院生				0.330*	0.130	2.544
研究生				0.233	0.139	1.673
(定数)	0.495	0.251	1.972	0.316	0.277	1.141
Adj. R ²	0.582			0.586		

*5%水準で有意（両側）

**1%水準で有意（両側）

はじめに、コントロール変数を除く説明変数 7 項目を投入した。その結果が **Model 1** である。ここからは、学習環境評価が高くなればそれだけ学習満足度が高くなる傾向にあり、逆に自らの日本語能力が不足していると感じていることによって学習満足度が低くなる傾向にあることが認められる。

次に、説明変数 7 項目に加えてコントロール変数を投入した。その結果が **Model 2** である。なお、在籍課程変数のうち「交流学生」変数は除外している。**Model 1** で指摘した傾向は引き続きこの **Model 2** でも認められる。なおこの **Model 2** からは、奨学金を受給することによって学習満足度が高くなる傾向にあるということが認められた。

以上の結果から、学習環境評価、日本語能力、および奨学金が学習満足度を規定する要因として浮かび上がってきた。これら 3 つの要因について、それぞれ分析を進めていくことにする。

（１）学習環境への評価

学習環境評価が学習満足度を規定するなか、学習環境評価を左右する要因は何なのか。表 8 は、学習環境の評価結果を従属変数、学習環境評価に影響を与えていると思われる項目を説明変数として回帰した結果である。なお説明変数として、アンケート中の設問から、専門書・研究資料の不足、図書館の利用頻度、留学生相談室の利用頻度、国際資料室の利用頻度、の 4 項目を採用した。またコントロール変数として、本学の在籍期間（月数）、および在籍課程を取り上げた。

Model 1 は、コントロール変数を除く説明変数 4 項目を投入したものである。ここからは、専門書や研究資料が不足していると考える留学生ほど学習環境に対する評価が低くなる傾向にあり、他方で図書館を利用する留学生ほど学習環境評価が高くなる傾向にあることがわかる。**Model 2** は、説明変

数4項目に加えてコントロール変数を投入したものである。ここでも今指摘した傾向は一貫している。

表8 学習環境評価を左右する要因について（重回帰分析）

	Model 1			Model 2		
	非標準化係数		t	非標準化係数		t
	B	標準誤差		B	標準誤差	
専門書・研究資料の不足	-0.246*	0.116	-2.126	-0.343**	0.121	-2.841
図書館の利用頻度	0.165**	0.045	3.658	0.125*	0.048	2.606
留学生相談室の利用頻度	-0.044	0.054	-0.810	-0.049	0.054	-0.900
国際資料室の利用頻度	0.057	0.049	1.171	0.062	0.050	1.239
在籍月数				0.001	0.002	0.264
学部生				0.137	0.180	0.760
大学院生				0.285	0.174	1.635
研究生				-0.015	0.189	-0.082
(定数)	3.675	0.189	19.458	3.652	0.235	15.533
Adj. R ²	0.061			0.054		

*5%水準で有意（両側）

**1%水準で有意（両側）

このことから、本学においては、学習環境評価を規定するものとして、図書館の利用頻度、および専門書・研究資料の不足、の2要因が浮かび上がってきた。このうち、施設の利用という観点から表9を見てみたい。表9は、図書館、留学生相談室、および国際資料室の利用頻度の平均点を算出したものである。ここから、図書館の利用頻度が比較的高い一方で、留学生相談室および国際資料室の利用頻度が低いことがわかる。アンケートでは教育環境として留学生相談室および国際資料室が設問項目にあげられていたが、施設使用の目的が異なるのかも知れない。この場合、課程学生と交流学生の比率を反映しているのだとも受け取れる。

表9 施設利用頻度（図書館、留学生相談室、国際資料室）

	図書館	留学生相談室	国際資料室
平均値	3.69	2.02	1.87
標準偏差	0.983	0.894	0.977
度数	278	275	276

以上、学習環境評価に影響を与える要因と、施設利用について検討してきた。

改めて検討結果をまとめると、図書館の利用頻度が高ければ学習環境評価が上がる傾向にあり、専門書や研究資料が不足していると考えられる場合には学習環境評価を下げる傾向にあるということが認められた。また、施設利用について検討した場合、図書館の利用頻度が高く、留学生相談室および国際資料室の利用頻度が低いことが認められた。

上記結果が示唆するものとして1点記しておきたい。それは、専門書や研究資料の不足を解消することについてである。本学は国内有数の蔵書数を有しており、このことは本学の魅力の一つとしてあげられる。留学生の図書館利用頻度の高さや、図書館の利用頻度が高い留学生ほど学習環境評価が高

くなる傾向にあるということは、こうした本学の魅力が留学生にも受け入れられていることを示唆する。他方で、留学生にとって、自分自身の学習や研究に必要な資料や専門書が不足しているということになれば、特に学位取得・専門分野の研究を目的として留学してきた学生にとっては本学での学習・研究にミスマッチを感じ、それが学習環境評価を低くすることにつながっていくと思われる。本学の誇るその蔵書数をもってしても専門書や研究資料の不足を指摘されるということは、留学生の学びに対する欲求が深く高度であることを示唆するといえよう。これを伴わせることによって、留学生の学習環境評価を高め、ひいては本学留学に対する満足度を向上させることにつながっていくと考える。

（２）日本語能力について

ここでは、日本語能力について検討を進める。

まず分析に先立って、日本語能力に関する変数を作成した。アンケートでは、アンケート回答時の日本語能力を 7 つの項目（日常会話、指導教員との会話、講義・授業の理解、専門書等の講読、レポート・論文執筆、ゼミでの討論・発表、試験答案の作成）にわたって尋ねている。ところが、これら 7 項目間の相関は非常に高い（表 10）。そこで、これら 7 項目を主成分分析によって合成し、この合成得点を分析に用いることとした。主成分分析の結果が表 11 および表 12 である。主成分分析により 1 つの主成分得点が抽出され、これを「回答時の日本語能力自己評価」（以下、回答時自己評価）とした。なお日本語力に関する分析においては、日本語能力について尋ねた 7 項目中 1 つでも無回答である 12 ケースは分析から除外している。

表 10 日本語能力に関する質問間の相関関係（ピアソンの相関係数）

		日常会話	指導教員 と話す	講義授業 の理解	専門書等 の講読	レポート 論文執筆	ゼミでの 討論発表
試験答案の 作成	相関係数	0.625	0.691	0.742	0.744	0.770	0.782
	有意確率（両側）	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	N	272	273	273	272	272	273
ゼミでの討 論発表	相関係数	0.634	0.752	0.770	0.743	0.827	
	有意確率（両側）	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	
	N	275	276	276	275	275	
レポート論 文執筆	相関係数	0.546	0.671	0.732	0.761		
	有意確率（両側）	0.000	0.000	0.000	0.000		
	N	274	275	275	274		
専門書等の 講読	相関係数	0.609	0.661	0.791			
	有意確率（両側）	0.000	0.000	0.000			
	N	275	275	276			
講義授業の 理解	相関係数	0.702	0.779				
	有意確率（両側）	0.000	0.000				
	N	276	276				
指導教員と 話す	相関係数	0.804					
	有意確率（両側）	0.000					
	N	275					

表 11 主成分分析の結果（寄与率）

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	5.330	76.141	76.141	5.330	76.141	76.141
2	0.606	8.655	84.796			
3	0.311	4.437	89.233			
4	0.250	3.566	92.799			
5	0.195	2.789	95.589			
6	0.157	2.244	97.833			
7	0.152	2.167	100.000			

表 12 主成分分析の結果（成分行列）

質問肢	成分
講義授業の理解	0.906
ゼミでの討論発表	0.903
試験答案の作成	0.878
指導教員と話す	0.878
レポート論文執筆	0.869
専門書等の講読	0.869
日常会話	0.800

在籍課程別、母語別の回答時自己評価の平均値をそれぞれ表 13、表 14 に示した。在籍課程別にみた場合には、交流学生および研究生の平均値が低いことがわかる。また母語別にみた場合には、「韓国」の平均値が高い一方で、「旧西欧」の平均値が低いことがわかる。これらから読み取れるのは、比較的日本滞在期間が短い研究生や交流学生において日本語力に不安を抱えている傾向にあるということ、そして旧西欧からの留学生において日本語力に不安を抱えている傾向にある、ということである。

表 13 在籍課程別の回答時自己評価（平均値）

	学部生	大学院生	研究生	交流学生
平均値	0.127	0.146	-0.255	-0.782
度数	62	144	40	24
標準偏差	0.890	1.010	0.910	0.961

表 14 母語別の回答時自己評価（平均値）

	中国	韓国	その他アジア	アフリカ	旧西欧	旧東欧
平均値	0.147	0.414	-0.101	-0.284	-0.597	0.165
度数	85	41	68	1	43	24
標準偏差	0.891	1.077	1.078		0.954	0.771

さて、日本語能力が不足していると回答した留学生の学習満足度が低くなる傾向にあることは前掲の表 7 よりわかった。このことを鑑み、以下では、回答時自己評価によって 2 つのグループに分けて分析を進めることにする。

グループを設定するに当たって、表 15 に回答時自己評価の基礎統計を示した。ここでは、平均値をもとにして 2 グループに分けた。すなわち、回答時自己評価が 0 点以上を「回答時自己評価高群」（以下、高群）、0 点未満を「回答時自己評価低群」（以下、低群）とした。

表 15 回答時自己評価の基礎統計

平均値	中央値	標準偏差	最大値	最小値
0.000	0.025	1.000	1.518	-2.710

学籍別、母語別の分布を表 16、表 17 に示した。学籍別にみると、学部生・大学院生では高群の占める割合が比較的高く、研究生・交流学生において低群の占める割合が比較的高いことが確認できる。また母語別にみると、「中国」・「韓国」・「旧東欧」では高群の占める割合が比較的高く、「旧西欧」では低群の占める割合が比較的高いことが確認できる。

表 16 学籍別の回答時自己評価（群別）

	学部生	大学院生	研究生	交流学生	合計
低群	25	56	23	18	122
高群	37	88	17	6	148
合計	62	144	40	24	270

$$\chi^2 (3) = 13.959 \quad (p=0.003)$$

表 17 学籍別の回答時自己評価（群別）

	中国	韓国	その他アジア	アフリカ	旧西欧	旧東欧
低群	32	10	32	1	32	9
高群	53	31	36	0	11	15
合計	85	41	68	1	43	24

では、どのような要因が高群と低群を分けているのだろうか。ここでは、入学前の日本語学習の有無、入学前の日本語能力自己評価、入学後の日本語学習の有無、および日本語学習の手段、の 4 項目をもとに検討してみたい。

表 18 は、入学前の日本語学習の有無である。ここからは、入学前に日本語を学習していた割合が低群・高群ともに高い一方で（高群で 97.97%、低群で 86.07%）、入学前に日本語学習をしていなかった割合は低群のほうが高いことがわかる（高群で 2.03%、低群で 13.93%）。

表 18 群別の入学前日本語学習の有無

	学習なし	学習あり	合計
低群	17 (13.93%)	105 (86.07%)	122 (100.00%)
高群	3 (2.03%)	145 (97.97%)	148 (100.00%)
合計	20 (7.41%)	250 (92.59%)	270 (100.00%)

$$\chi^2 (1) = 13.824 \quad (p=0.000)$$

表 19 は、入学前の日本語能力自己評価³の分布である。これは、表 18 にて入学前の日本語学習をしていたと回答した 250 ケースを対象に、本学入学時の日本語能力を自己評価してもらったものの群別の分布である。なお、無回答であった 2 ケースは除外している。高群では、144 ケース中 136 ケース (94.44%) が「中級後半」または「上級」と回答しており、「初級」または「中級前半」と回答しているのは 5 ケース (3.47%) にとどまっている。低群では、104 ケース中 63 ケース (60.58%) が「中級後半」または「上級」と回答しているものの、「初級」または「中級前半」と回答しているのが 34 ケース (32.69%) となっていることがわかる。

表 19 群別の入学前日本語能力自己評価の分布

	わからない	初級	中級前半	中級後半	上級	合計
低群	7 (6.73%)	15 (14.42%)	19 (18.27%)	32 (30.77%)	31 (29.81%)	104 (100.00%)
高群	3 (2.08%)	3 (2.08%)	2 (1.39%)	28 (19.44%)	108 (75.00%)	144 (100.00%)
合計	10 (4.03%)	18 (7.41%)	21 (8.64%)	60 (24.69%)	139 (57.20%)	248 (100.00%)

$\chi^2 (4) = 61.430$ ($p=0.000$)

表 20 は、入学後の日本語学習の有無である。表 18 と比較してみると、入学後に日本語学習をしなくなった留学生は、全体で 20 ケースから 98 ケースに大幅に増加している。これを群別にみると、低群では 17 ケースから 35 ケースへ、高群では 3 ケースから 63 ケースへ、それぞれ大幅に増加している。他方で、高群 148 ケース中 85 ケース (57.43%)、低群 122 ケース中 87 ケース (71.31%) が、入学後も日本語学習を続けていることがわかる。そして、低群の方が高群よりも日本語学習を続けている割合は高い。

表 20 群別の入学後日本語学習の有無

	学習なし	学習あり	合計
低群	35 (28.69%)	87 (71.31%)	122 (100.00%)
高群	63 (42.57%)	85 (57.43%)	148 (100.00%)
合計	98 (36.30%)	172 (63.70%)	270 (100.00%)

$$\chi^2 (1) = 5.571 \quad (p=0.018)$$

³ 本学入学時の日本語能力を、学習時間および日本語能力検定試験の級をもとにして、「初級」(学習時間 300 時間以下)、「中級前半」(日本語能力検定 3 級～2 級程度、学習時間 300～600 時間程度)、「中級後半」(日本語能力検定 2 級～1 級程度、学習時間 600～900 時間程度)、「上級」(日本語能力検定 1 級合格以上、学習時間 900 時間以上)、および「わからない」「その他」の 6 選択肢より 1 つ選んで回答してもらった。なお、本アンケートでは「その他」は 0 ケースであったので分析には反映されない。

表 21 は、表 20 で入学後も日本語学習をしていると回答した留学生 172 ケース（高群 85 ケース、低群 87 ケース）について、どのような手段で日本語学習を進めているかを尋ねたものである（複数回答可）。ここからは全体の傾向として、日本語学習の手段に「授業科目」「自分」「チューター」と回答しているのがほとんどであり、それも「授業科目」と「自分」とに回答が集中していることが読み取れる（該当する 172 ケースに対して、「自分」112 ケース（65.12%）、「授業科目」97 ケース（56.40%）、「チューター」27 ケース（15.70%））。この傾向は、低群（87 ケースに対して、「授業科目」55 ケース（63.22%）、「自分」53 ケース（60.92%）、「チューター」15 ケース（17.24%））ならびに高群（85 ケースに対して、「自分」59 ケース（69.41%）、「授業科目」42 ケース（49.41%）、「チューター」12 ケース（14.12%））を問わずいえることでもある。

表 21 群別の入学後日本語学習の手段（複数回答可）

	授業科目	日本語学校	日本語教室	個人レッスン	自分	チューター	回答者数
低群	55 (63.22%)	1 (1.15%)	8 (9.20%)	2 (2.30%)	53 (60.92%)	15 (17.24%)	87
高群	42 (49.41%)	1 (1.18%)	1 (1.18%)	1 (1.18%)	59 (69.41%)	12 (14.12%)	85
合計	97 (56.40%)	2 (1.16%)	9 (5.23%)	3 (1.74%)	112 (65.17%)	27 (15.70%)	172

※ 表中（ ）内の百分率は、各群回答者数に占める割合を示す。

以上、日本語能力について検討してきた。検討の結果をまとめておこう。まず、回答時自己評価をもとに検討してみたところ、研究生・交流学生において日本語に不安を抱える傾向にあること、そして「旧西欧」を母語としている留学生においても日本語に不安を抱えることが見えてきた。次に、回答時自己評価の平均値をもとに高群と低群に分け、どのような要因が高群と低群を分けているのかを検討してみたところ、低群は高群に比して、入学前の日本語学習率が低い一方で入学後の日本語学習率は高いこと、そして入学前の日本語能力自己評価が低い傾向にあることが読み取れた。また群を問わず、本学での日本語学習の中心にあるのは授業と自習であることもわかった。

以上の検討結果から 1 つ記したい。日本語能力に不安を抱えることが学習満足度を下げる傾向にあるという先述の指摘は、日本語能力に不安を抱えさせないようにすることで学習満足度の向上が期待できることを示唆する。しかし、本アンケートにて分かったことは、在籍課程や母語によって日本語能力に不安を抱えるか否かという点、本学での日本語学習の中心が授業と自習であるという点などであって、「日本語能力に不安を抱えさせないようにするにはどうすればよいか」という問いへの答えではないことは、今後の課題として残されるものだろう。また、日本語学習の方法として、授業または自習という共通した学習方法を採用しながらも属性によって日本語能力や満足度に差が出ているということは、留学生というひとくくりでもって日本語学習させていくことの困難性を確認するものでもある。

（３）奨学金制度について

奨学金受給の有無が本学における勉強や学習満足度を左右する要因であることはすでに確認された。事実奨学金は本学の留学生の主要な財源である。アンケートで「現在奨学金をもらっていますか」の問いに対して「はい」と答えた学生が 281 名中 240 名、85.1%であった。留学生の大半が奨学金受給者であるだけでなく、留学生の生活費において奨学金の占める割合は極めて高い。アンケートには、一ヵ月の平均収入に関して、「奨学金」「アルバイト」「国からの送金」「その他」そしてそれら全ての「合計」金額を記入させる設問がある。その平均値を集計したのが表 22 である。本学留学生の生活費の月額平均は 148,200 円で、そのうちの 131,100 円、約 88%が奨学金からまかなわれている。

表 22 本学留学生の収入構成

	奨学金	アルバイト	送金	その他	合計
平均値	131.11	10.79	2.9	3.47	148.28
比率	88.4%	7.3%	2.0%	2.3%	100.0%
標準偏差	49.281	19.269	11.776	22.934	50.436

*単位は千円

奨学金を受給していること自体が勉強や学習の満足度を左右する一方、奨学金の多寡や奨学金の種類⁴については、勉強・学習満足度に対する有意な効果は確認されなかった。しかしながら奨学金の制度運用のあり方に関しては多くの意見が寄せられており、奨学金を授与させるか否かという議論から、誰を対象にどの程度授与させるべきかを考える段階にきていることがわかる。奨学金の効果をより高めていくという観点から、以下では自由記述のかたちで述べられた奨学金に関する留学生の意見を紹介したい。

「奨学金に関して不満に思うことがあったら書いてください。」との設問に対し、56 名が意見を寄せている。種別に分けると、金額が少ないなど奨学金受給額の多寡に関する意見が 6 件、支払のタイミングなど受給方法に不満を述べる意見が 13 件、奨学金制度の運営について年齢制限を無くすべきなどの対象者選定について不満を述べる意見が 15 件、そして奨学金に関する情報が不足していたなどの情報の充実を求める意見が 19 件寄せられた。残りの 4 件は概ね満足とする意見である。

制度の運用や奨学金の金額については奨学金を授与する団体や機関が検討主体となる項目であり別途報告の機会を設けるとして、ここでは大学としてある程度対策を講ぜられると思われる分野として、「情報不足」に関連して寄せられた意見に焦点をあてたい。奨学金に関する情報が不足していると

⁴ 現在奨学金をもらっている、と答えた学生に対し、奨学金の種類をたずねており、学生は（１）日本政府（文部科学省）奨学金、（２）地方公共団体の奨学金、（３）如水会奨学金、（４）（独）日本学生支援機構の学習奨励費、（５）日本国内の民間団体などの奨学金。（５）その他の自由記述、から選択する。

いう意見のなかでも特に多かったのは奨学金の選定基準が不透明であるという意見 13 件であった。

「選考基準がわからない」「選考基準があいまいすぎる」というストレートな疑問から、「いったい何に基づいて選考しているのか分からず頑張る方向性がわからない」という勉学へのモチベーションという観点からも早急な対応が必要ではないかと思われるもの、逆に「成績も他人より優秀ではなく、経済的に困難でないのに、なぜ高額な奨学金がもらえたかわからない。」といった制度自体の意義が問われる内容もあった。

情報提供や公開について改善を求める意見

● 情報や説明が不十分

1. 奨学金に関する説明が担当者により違うときがある
2. 入学前に奨学金に関する情報がなかった。
3. 日本に到着するまで奨学金の情報がなかった。
4. 「留学のため前もってお金を用意すべき」といわれたことがある。対応がとても不親切。
5. どの奨学金でも選ばれた学生の学籍番号だけでも公開してほしい。
6. 初めに全奨学金の種類や応募スケジュールを教えて欲しい。奨学金別にひとつずつメールで知らせてもらっているが、最初に出る奨学金に応募し決まっても、後でもっといい奨学金が出たらあきらめるしかない。もっと計画的に奨学金の応募をしたい。

● 選定基準について

A. 基準が不透明

1. いったい何に基づいて選考しているのか分からず頑張る方向性がわからない。
2. 選考基準をもっと明確にして欲しい。選考はより透明性を求める。
3. 基準や制度の設計をクリアにして欲しい。あいまいすぎる。
4. 選考基準がよくわからない。国で区別しないで欲しい。
5. 選考基準を明らかにしてほしい。
6. 奨学金の選考基準がよくわかりません。成績があまりよくないのにもらえる人もいますから。
7. 選考基準には透明性がない。何回応募しても推薦されない。
8. 選考基準がわからない。
9. 選考の基準を公開すべき。
10. 2つ以上もらえた人もいれば、まったくもらえない人もいます。
11. 成績も他人より優秀ではなく、経済的に困難でないのに、なぜ高額な奨学金がもらえたかわからない。
12. 研究科により成績の評価基準が違うし、同じ研究科であっても違う科目ならば評価基準が違う。楽にAが取れる科目もあれば、辛うじて合格できても将来の研究に役立つ科目もある。より難しい科目に挑戦しようと思っている学生をもっと支援すべきです。奨学金は選考基準作りがとても難しいと思う。
13. 噂かどうかわかりませんが、社研や経研の学生は商研（MBA）の学生よりも奨学金がもらいやすいのでしょうか。MBAの私費留学生の中で、母国で仕事経験があつて、収入がある程度ありましたが、日本の物価に比べたら本当に少ないので、MBAの私費留学生にも多くのチャンスを下されば、留学生活の助けになると思います。

これらの意見の多くに大学が対応できると思われる。大学のHPや進学説明会を通してすでに相当な情報公開を図っていることではあるが、より詳細かつ目に止まりやすい公開と周知が必要なのであろう。もっとも奨学金受給者の選定基準自体が明確に定められていないという問題もある。「基準の明確化」とその周知については、本報告書の要所で指摘されている課題である。留学生の入学審査から奨学金受給者の選定、学生寮の入居者、そして留学生に授与する単位や学位の判定基準の明確化については、本学というよりも日本全体において立ち遅れている分野である。教員や担当者個々の裁量ではなく、明文化された基準を設定し、これを遵守することが今後一層求められるものとする。

3. 9月入学は必要か

アンケートの中に「入学時期は、何月であればあなたにとって一番よいですか」という設問があり、これに対し学生は1月から12月の中から1つだけ選択するよう求められている。表23は回答を課程別に集計した結果である。課程により多少の差はあるものの、総体的に3月、4月、そして9月と10月に集中しており、それらのいずれかを希望する者で93.8%を占める。ここでは秋入学の可能性を考えることに焦点をあてるために、9月と10月の入学を希望する学生を一つのグループとし、彼らに中心に分析する。

表23 入学希望月

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
学部生	0	0	6	40	2	1	0	0	8	3	1	0	61
大学院生	1	3	9	92	0	0	0	2	25	14	0	1	147
研究生	0	2	3	15	0	0	0	1	11	8	0	0	40
交流学生	1	0	2	5	1	0	1	0	5	8	0	0	23
合計	2	5	20	152	3	1	1	3	49	33	1	1	271
	0.7%	1.8%	7.4%	56.1%	1.1%	0.4%	0.4%	1.1%	18.1%	12.2%	0.4%	0.4%	100.0%

表24は、秋入学の希望の有無を、課程別、母語別に示したものである。

まず、秋入学を希望する留学生は計82名（9月49名、10月33名）、全体の30.3%となっている。課程別にみると、学部生の18.5%、大学院生の26%、研究性の42.2%、交流学生の54.2%が秋入学が最も良いと答えており、研究生並びに交流学生の中に秋入学希望者が多いことが確認される。母語別に見ると韓国語を母語とする留学生が秋入学を希望する割合は7.1%と少なく、他のアジア諸国から

の留学生は 28.6%、中国からの留学生は 30.7%、旧西欧からの学生は 31.8%、旧東欧からの留学生は 54.2%が秋入学を希望している。アフリカからの留学生でアンケートに回答した学生は 1 名であったが、その学生も秋入学を希望している。

表 24 秋入学希望者

課程別		学部生	大学院生	研究生	交流学生	合計
秋入学の希望なし	度数	52	111	26	11	200
	学籍 の %	82.5%	74.0%	57.8%	45.8%	70.9%
秋入学を希望する	度数	11	39	19	13	82
	学籍 の %	17.5%	26.0%	42.2%	54.2%	29.1%
合計	度数	63	150	45	24	282
	学籍 の %	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

母語別

		中国	韓国	その他アジア	アフリカ	旧西欧	旧東欧
秋入学の希望なし	度数	61	39	50	0	30	13
	学籍 の %	69.3	92.9	71.4	0	68.2	48.1
秋入学を希望する	度数	27	3	20	1	14	14
	学籍 の %	30.7	7.1	28.6	100	31.8	51.9
合計	度数	88	42	70	1	44	27
	学籍 の %	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

研究生、交流学生、そして欧米からの学生が秋入学を望む傾向にあるのだが、この属性はかならずしも同一項として括られるわけではなく、たとえば秋入学を希望する研究生19名のうち欧米の学生は 11名と過半数を占めるものの、交流学生の24名中で欧米からの留学生は9名にとどまる。

さらに秋入学を希望する学生の相対的傾向を確認するために、秋入学の希望者を、学籍や母語の他、本学入学の目的並びに入学までの期間などで回帰した結果を表 25 に示している。サンプル数が少ないせいもあり信頼性のある分析ではないが、この結果から秋入学希望者の傾向を読み取るならば、まず、交流生そして研究生の中にそのニーズが強いこと、また来日から入学までの期間が短いことが統計的にも高い有意性を以って示されている。また奨学金がもらえるとの理由で来日している学生も秋入学を望んでいる。母語別では旧ソ圏からの留学生が秋入学を望む傾向にあることが確認できる。

表 25 秋入学希望者のプロビット回帰

パラメータ	推定値	標準誤差	Z
入学迄月数	-0.018**	0.006	-2.857
留学生課コード・学部生	-0.843*	0.361	-2.336
留学生課コード・大学院生	-0.505	0.318	-1.586
留学生課コード・研究生	-0.304	0.356	-0.853
家族のすすめ	0.102	0.450	0.227
先生先輩友人のすすめ	-0.082	0.203	-0.405
大学HP	-0.585	0.268	-2.182
進学説明会	0.093	0.386	0.241
学びたい専門分野の存在	0.130	0.191	0.678
協定校	-0.155	0.513	-0.303
就職に有利	-0.251	0.295	-0.850
奨学金がもらえる	0.697*	0.299	2.333
その他	-0.095	0.459	-0.208
中国	0.159	0.310	0.513
韓国	-1.013*	0.428	-2.368
アジア	0.066	0.303	0.216
アフリカ	1.934	1.629	1.187
西欧	-0.114	0.330	-0.347
東欧	0.468	0.386	1.211
定数項	0.193	0.434	0.445
X^2	226.273		

* 5% 水準で有意（両側）

**1% 水準で有意（両側）

秋入学を最適だとする学生が 282 名中 82 名（29%）いるということは、本学留学生の中に秋入学の「ニーズがある」と判断して良いだろう。もとより入学機会のオプションは数多く提供した方が受入れの幅は広がることは当然のことではある。留意すべきは、秋入学を希望する学生の属性や留学目的・形態を知り、効果的かつ無駄のない 9 月入学の実施とそれを支えるインフラ整備を検討しなくてはならないことだろう。たとえば、9 月入学を希望する学生には交流学生が多く、これらの学生は現在のところ短期間の文化交流的な目的で来日する学生が多い。これらの学生に対しては 9 月入学の実施と同時に送り出し国と単位の互換性を確立するなどして、より実質的な学習に結びつく留学体験を提供することができれば、留学のインセンティブも増すと思われる。一方、先に述べた、日本というよりも本学を特に選択した学生は、その学術的専門性を選択の理由としており、また本学入学までに日本滞在期間も長く、特に秋入学を強く希望している傾向は見られない。これらの学生には入学の時期よりもむしろ専門性のさらなる充実を図ることが、より適切な対応であると思われる。

まとめ

アンケートに回答した留学生を可能な範囲でグループ化し、それぞれの傾向とニーズを把握しようとするのが本稿の趣旨であった。本学の留学生の中核を成すのが学位取得を目的とし、専門知識の修得を目指す学生であることが確認され、またこれらの学生の本学の教育環境に関する満足度が高いことがわかった。これらの学生は概ね日本語に長けており、英語によるプログラムへのニーズはそれほど高くなく、また秋入学への希望も高くない。このことから、学位取得と専門学習を目的とする学生に対しては、教科のさらなる充実と専門書の提供を含む研究サポート体制を一層拡充することが適切かつ有効な方策であると考ええる。また、これら学生は来日から入学前までの期間が長いことから、留学生獲得という観点からは、国外にいる潜在留学生もさることながら、国内に滞在する学生に一層注目することが肝要であろう。

一方交流学生や研究生など短期滞在の留学生、及び旧西欧諸国からの留学生は、自分の日本語能力に関する不足感が高く、これが学習満足度の低さにもつながっている。本報告書に掲載されている他の調査結果も参考にすると、彼らの英語によるプログラムへのニーズは高いものと考えられる。また交流学生は秋入学実施への希望が高いことが本アンケート結果から確認されている。短期滞在型の留学生については「短期プログラム」の計画が進んでおり、量、質ともに今後体制が拡充されるものと思われる。

本学の留学生を上記の 2 グループ、学位取得型と交流型に括るならば、前者がアジア諸国の学生、後者は欧米の学生と大きく分けることも可能であり、それぞれの地域特性に即した受入と支援、そして教育を設計していくことが考えられ、これについてはすでに然るべき方策が講じられているものと思われる。一方、今後留学生数の大幅な増加を企図するならば、潜在的なニーズを模索することも問われるのだろう。例えば、学位取得型の学生が多いアジア諸国の学生に対し、交流プログラムへの参加勧誘を強化することは適切ではないのか、また、欧米などから短期交流を目的に留学した学生の中に、学位取得のニーズが本当に低いのか、などを継続的に検討していくことが必要であると考ええる。

参考文献

二宮皓, 2004, 『留学生施策の戦略的方策に関する研究：外国人留学生の日本留学に関する意見調査——大学院留学生調査結果報告書——』 広島大学 平成 13-15 年度科学研究費補助金特別研究促進費 (研究課題番号：13800004)。